

知識は自然種か？

青木滋之 (Shigeyuki AOKI)

日本学術振興会特別研究員 PD (名古屋大学情報科学研究科)

認識論の自然化というプロジェクトを示唆した 1969 年のクワインの論文「自然化された認識論」および「自然種」以来、様々な形態の自然主義認識論が提唱されてきた。本発表では、アプリアリな概念分析によって知識とは何かという問いに答えようとする伝統的な認識論に抗して、概念分析ではなく、知識という自然現象そのものを経験的に探求することを提案する、Kornblith の自然主義認識論を取り上げたい。私が、こうした自然種を軸とする Kornblith 流の自然主義認識論に魅力を感じるのは、以下のような理由に基づく。

- ・ 我々が具体的な形で自然化された認識論を展開させていくにあたっての、1つの有望なプログラムを与えている。「自然種」をキー・ワードにして、実験心理学や動物行動学の成果を人間の知識の分析に積極的に取り込んでいく枠組みを提供)
- ・ さらに、伝統的な基礎付け主義認識論に対するオルタナティブとして、「知識とは何か?」「知識はいかにして可能か?」「知識を得るためにはどうすべきか?」といった一連の問いに対して、システムティックな回答を与える展望をも与えている。つまり、Kornblith の自然主義認識論のプログラムは、具体性と体系性とを備え、具体的に自然主義認識論を推進しようとする者にとって、1つの有望な試金石になるだろうと思われるのである。

「知識はアルミニウムや石と同じく自然種の 1つであり、経験的探求の対象となる」という Kornblith の中心的な主張が支持できるかが、本発表の中心的な検討課題である。それを本発表は、以下のような手順で検討していく。

(1) 自然種とは何か? ---- Kornblith(1993)は、Lockeが提唱した種の実在的本質を手掛かりとしながら、自然種＝ホメオスタティックな関係にある特性のクラスター(群)という見解を採用する。例えば、水は基底的なレベルにおいて H_2O という形で化学的に安定しており、環境の変化に直面しても恒常性を維持する。水がゲリマンダ一的な種ではなく「自然をその結合部で裁断する」自然種であるのは、こうした理由に基づく。

(2) 知識を自然現象として捉える ---- Kornblith(1995,1999)によれば、我々が知識論で達成しようとするのは知識の概念の理解ではなく、知識そのものを理解することである。これは分かり易い例で言えば、アルミニウムや石について我々が知ろうとする時に、我々のアルミニウムや石についての概念をアプリアリに分析しても無意味であるのと同じく、知識についても、知識の概念ではなく自然現象としての知識を経験的に探求することを指す。

(3) 知識は自然種か? ---- (2) の主張は、知識をアルミニウムや石といった自然種と同等に並べられることを提案するもので、すぐには受け入れ難いことが予期される。(1)

で提出された自然種の理解はもともと、帰納的推論の問題への解答のために提出されたものであり、(2) で前提されているような、知識現象を救うものとしての自然種ではない。ここで、**Kornblith(2002)**はこのギャップを埋める議論を行っている。**Kornblith**は認知行動学の成果を援用しながら、動物の知識 **animal knowledge** というクッションを置き、アルミニウム・石→人間の知識というギャップを埋める作業を行っている。つまり、すでに経験的探求の対象となっている動物の知識と類比的に、人間の知識も経験的に扱われることを提案するのである。

もちろんながら、以上のようなタイプの自然主義認識論プログラムには多くの反論が予想される。一方で、知識分析には「哲学的直観」や「言語的直観」に基づくアプリアリなアプローチが不可欠(不可避)であるという **Bealer** の批判があり、他方では、言語による推論・正当化を欠く動物から人間へのアナロジーは不適切とする **Bermudez** の批判がある。**Kornblith** 流の自然主義認識論者は、これらに対してどのような返答を行うことができるだろうか。

まず **Bealer** の路線での批判に対しては、いかにアプリアリに見える直観であってもそれが経験的に形成された産物だと返答することが可能である(それゆえ、ある事例が知識に該当するか否か明確ではない場合がある)。さらに、アプリアリな直観は知識分析のためのリソースとして貧弱であり、経験的な発見物によって補完・訂正されていくことが望ましいとも指摘できる。

次に **Bermudez** の路線での批判に対しては、言語を介さない動物にも知識が宿っていると見なせる事例が多々あることを指摘することができる。**Kornblith** が認知行動学の文献から挙げているチドリ、イルカ、チンパンジーの事例に加えて、上位サルの前でエサがないように振舞うサル事例等が挙げられる。こうして、動物と人間が共有する、第一階の論理構造に対する感受性と、人間のみが持つ第二階の反省的把握能力とは切り離して考えることができる。

しかし、こうした動物の知識と類比的に人間の知識を考える **Kornblith** の戦略には、同時にある種の限界も抱え込んでいる。イヌでも体現するような、単純な選言的三段論法よりもより複雑な記号操作や、それよりも単純な作業(数の認識、簡単な計算)においてすら、アナロジーは成立しないことが比較認知学の成果から判明しているが、これは **Kornblith** 流の自然主義認識論の体系性を大きく傷つけるものではないか。さらに体系性という点について言えば、**Kornblith(1999,2002)**が用いる信頼性主義についても、**Goldman**とは別な仕方で、それがいかに自然主義的な起源を持つのかについても、一貫した説明が求められる。

これら2点について、自然主義者はあくまでも経験科学の成果に忠実な範囲で、アプリアリな直観によって一挙に裁断することなく、自然主義認識論を推進させていくことが求められる。現時点で私は、確かに自然種による知識へのアプローチは制限された知的領域に留まるものの、その信頼性主義の使用については、認知行動学の経験的成果から自然と導けるものであると考えている。つまり、限られた範囲であっても、具体性・体系性を擁護することは十分可能である。この点を本発表の最後で私は主張したいと思う。